



公益財団法人

日本体育協会

総合型スポーツクラブ
公式メールマガジン第112号
平成27年2月20日発行

東京オリンピック・パラリンピック
×
総合型クラブ

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ

日本のスポーツ推進に大きく寄与するであろう、2020年の東京オリンピック・パラリンピック。それは地域のスポーツ活動を支える総合型クラブにとっても、総合型クラブの存在意義を、地域にそして国民にアピールするチャンスでもあります。今回は、オリンピックと総合型クラブの関わり方の一つである「スポーツボランティア」についてお話を伺いました。

写真左から／二宮雅也氏、菊地正氏、但野秀信氏

対談者

菊地 正氏
NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF 副理事長
総合型地域スポーツクラブ公式メールマガジン 編集委員長

二宮雅也氏
文教大学人間科学部人間科学科 准教授

但野秀信氏
NPO法人日本スポーツボランティアネットワーク
公益財団法人笹川スポーツ財団

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ
テーマ 1

スポーツボランティアとは

—日本のスポーツにおけるボランティアの歴史—

**スポーツボランティアは
“日常の風景”という意識を**

菊地 (以下、敬称略) 総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブ)の認知度向上は、各地域の大きなテーマです。そこで2020年東京オリンピック・パラリンピックへ向けて、どのような協力の方法があるのか、この座談会で、そのヒントや具体的なアイデアを見出せればと思います。

但野 まずは、日本スポーツボランティアネットワーク(以下、JSVN)の設立経緯からお話いたします。私は笹川スポーツ財団の職員です。笹川スポーツ財団は、スポーツフォーエブリワンをスローガンに、生涯スポーツの振興を図っている団体です。以前より、笹川スポーツ財団では、諸外国で行われていた都市型マラソンの日本開催を目指し、諸外国の事例調査などを行ってまいりました。そして、運営の中心となっていたスポーツボランティアに着目し、スポーツ・ボランティアリーダー養成研修会を05年から開始し、07年の第1回東京マラソンでは、7百人のボランティアリーダーと1万人のボランティアとともに運営にあっています。その後、09年の第3回大会まで、日本財団の助成を受けてスポーツボランティアの運営管理を行い

ました。

同時期に、全国で増え始めたランニングイベントの主催者からスポーツボランティアに関する多くの問い合わせがあり、それまでの経験をお伝えしていました。そんな中、11年に笹川スポーツ財団が行ったスポーツボランティア団体に対する調査により、一番の課題は実際に活動する機会が少ないことであるとわかりました。

そこで、地域のスポーツボランティア団体が集まり、スポーツボランティアの活動機会の提供や養成事業を共有することで、日本のスポーツボランティア団体の活性化に貢献できるのではないかと考えました。そして、12年7月にNPO法人の認証を受けJSVNが設立しました。

菊地 NPO法人認定後の活動は、どのようなものでしょうか？



菊地 正

但野 JSVNは、先にも述べたとおり、活動機会の提供や養成事業を行う日本のスポーツボランティア団体のネットワーク化を目的として活動しています。20年東京オリンピック・パラリンピックは、我々にとっても一つの契機ではありますが、そのために作られた団体ではないのです。

菊地 JSVNの講習会で講師を務める二宮さんは、スポーツボランティアについて、どのようにお考えですか？

二宮 スポーツボランティアという言葉を初めて聞く人には、まず、特別な活動ではないことを伝えていきます。私が少年野球をしていたころ、父が運転する車にチームメイトも同乗する、あるいは、母が差し入れてくれたおにぎりなど、ボランティア活動はスポーツの中に当たり前のように存在していました。地域レベルで見たら、野球が得意なおじさんが少年たちに野球を教えることもそうです。そのように日本の社会に当たり前にあつたことだとイメージしてもらおうようにしています。



二宮雅也

初めてボランティアを募集した 86年神戸ユニバーシアード大会

二宮 市民レベルの活動が、次第に大きなイベントにつながっていく、そのような歴史が日本のスポーツにはあります。

かつて、スポーツイベントの開催は多数の関係者のお手伝いによって成り立っていました。いろいろな関係上、お手伝いをせざるを得ない人たちもいたというのが実状だったと思います。それが86年の神戸ユニバーシアード大会で、初めて市民の皆さんにボランティアをお願いする呼びかけをしたのです。そこから大きなイベントでボランティアの人材を運営に生かすモデリングが少しずつ増えていきました。そのあとに行われた98年の長野オリンピック、02年の日韓ワールドカップでは、かなり組織化したボランティアの募集や運用がされました。この頃にス

ポーツボランティアという一般的なイメージができたのだと思います。そして、05年から笹川スポーツ財団を中心に、第1回東京マラソンを意識しながらボランティアリーダーの育成など、専門性の高い講習を重ねていきました。それが日本にスポーツボランティアが広がった歴史ですよ、と話して、身近なものだと感じていただいています。

また、一般のスポーツボランティアの講習では、東京マラソンでのボランティアの活動の動画や写真など、映像を見せながら説明することも重視しています。ただし、スポーツボランティアは大会だけのものではないことも強調します。イベントを支えるボランティアはスポーツボランティアという認識が根深くある中で、総合型クラブでの活動や日常的なスポーツを支援する人、障がい者スポーツをサポートする人もスポーツボランティアであり、そう考えると活動の幅は想像するよりも広いものです。

菊地 私も、総合型クラブの関係者から「クラブ作りを、やらされている」といった雰囲気を感じたときは、もともとはボランティア精神から始まったことであるという部分を強調して伝えるようにしています。我々の日々の活動は、地域の協力のもとクラブ作りを

することであり、受益者負担で自立した運営をすることが総合型クラブ本来の主旨です。是非、ボランティア精神とともに東京オリンピック・パラリンピックを成功させ、それが20年以降の日本のスポーツ界や総合型クラブの生きる道へとつながればいいと思います。

各連絡協議会では、20年に向けてどのような協力ができるのか、そして、どのように総合型クラブの知名度を上げるのかを討議しています。これからはより具体的な話をしなければならぬと思います。

二宮 スポーツボランティアは、自分のためにする側面が強くても構わないと思っています。スポーツという単語がボランティアの先にあるのですから、自分がしたいからする、それでいいのです。それが、気がついたら誰かのた

めにもなる。そのように伝えていきます。

菊地 そこがスポーツボランティアの原点ですね。

二宮 群馬県の新町スポーツクラブでは、早い時期からユースボランティア制度を、唯一総合型クラブで導入していました。現役の大学生がボランティアとして関わるなど、以前から“人”に注目しています。



但野秀信

菊地 64年の東京オリンピックのとき、私は中学1年生でした。当時は、周辺のほとんどの小・中学校が休校になり国立競技場で国旗を掲揚したり、マラソンのコースだった甲州街道を掃除したりしました。当時、中学生だった私は、ボランティアという言葉は知りませんでしたが大歓迎ムードの中、わくわくしながら大人と一緒にお手伝いしたという記憶が残っています。ボランティアとは本来そういうもの。ドイツの総合型クラブもボランティアによって支えられています。日本はまだボランティアに馴染みがありませんが、二宮さんが言うように、生活の中に当たり前のようにボランティアが入っていけばいいのだと思います。その辺も今度のオリンピック・パラリンピックで国民の皆さんに理解してもらえるといいかなと思っています。

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ
テーマ 2

総合型クラブとスポーツボランティア

—さまざまな関わり方のカタチを考える—

するスポーツと同様に
支えるスポーツの普及を

菊地 神奈川県総合型スポーツクラブネットワークでは20年に向けて、スポーツに特化したスポーツ英会話に取り組んでいます。また、3月の横浜マラソンの給水所を県内の総合型クラブがスタッフを出して担当することになりました。このことでスポーツボランティアの楽しさを知っていただき、オリンピックに向かっていけたらと思っています。全国的な事例ではなく恐縮ですが、我々のクラブ（以下、SELF）では、地域に住むアフリカのコンゴ出身の方をきっかけに、国際交流の話が持ち上がりました。今、現地のオリンピック委員会と連絡を取って、オリンピック選手に来日していただく準備を進めています。但野さんは、総合型クラブがスポーツボランティアとしてできることは、どういったことだと思いますか？

但野 最近の例ですが、行政で初めてJSVNの会員になっていただいた館山市の「若潮マラソン」があります。30回以上開催され、現在では1万人規模のイベントになっていますが、今までは関係者に声をかけて人を集め運営されていました。これからはJSVNと連携することで市民が自主



的に参加するスポーツボランティアを増やし、その受け皿として総合型クラブや行政が協働する方法などを共に模索していきたいと考えています。そんなこともあり、先月、館山市民の方に広くスポーツボランティアの楽しさを知っていただくため、お話をさせていただいたところでした。

菊地 実は、SELFでも今、館山市の農家の方とタイアップをして、子どもたちが田植えや稲刈りを体験する場の提供やアスリートの方に農家の皆さんと米作りをしてみようイベントなどにご協力いただいています。また、館山市では殺陣教室が人気なのですが、教室のリーダーをSELFのメンバーがしています。館山市では、地元のお祭りを地域みんなが支えるなど、地域がまとまっている印象を持ってい

ました。若潮マラソンのスポーツボランティアとしての取り組みも小さな声掛けから、さらに地域に愛されるイベントになる気がします。地域の小さなイベントが発展して大きなイベントへと成長する、日本はちょうどその時期にあるのだと思います。

総合型クラブは、指導者を含め、地域のボランティアに頼っている現状です。しかし、ボランティアだからといって、質の向上を考えなくていいわけではありません。施設が学校の体育館だろうが、コンテントの質を保つことは非常に重要な問題です。スポーツボランティアは運営だけでなく、指導についてもさまざまなノウハウを持っていると考えますが、JSVNの講習会は誰でも参加できる仕組みなのでしょうか？

但野 スポーツボランティアを学ぶ研修会は4つの階層に分かれていて、中学生以上であれば誰でも参加可能です。ただし、プログラムにより1500〜6000円の受講料をいただき、修了証やライセンスを発行しています。

菊地 ライセンスなどの環境が整いつつある中、これから総合型クラブができることについて、二宮さんはいかがでしょう？



二宮 全国の総合型クラブに共通するのは、スポーツに対して前向きな人たちが関わっているということだと思っています。国が示したスポーツとの関わり方の中で、「するスポーツ」の身近な拠点の一つに総合型クラブがあるのは、非常にわかりやすい構図です。これでスポーツの「Do」の部分が増えることは、十分期待できると思います。次に、「みるスポーツ」について、これは残念ながら身近にビッグクラブがある地域と、テレビでの観戦が主になる地域の差は、総合型クラブだけの活動ではクリアできない部分であります。

そして、「支えるスポーツ」について、総合型クラブは、このことについても普及の命題を抱えていることを、クラブマネジャー含め関係者が意識することが大事だと思います。スポーツボラ

ンティアは、スポーツをするのと同じくらい楽しいものだと思わなければなりません。種目数を増やして会員の満足度を上げる努力をするように、スポーツボランティアの活動機会を提供することも真っ先にすべきだと思います。

総合型クラブも積極的に「支える」楽しさを発信する

二宮 例えば、15年にスタートする横浜マラソンという地域のイベントに、総合型クラブが積極的に関わるのは非常に大事なやりかたです。なぜなら、その地域のスポーツイベントに、日頃のスポーツ活動を支える総合型クラブ

が関わるのはごく自然な姿だからです。横浜市がそのような事例を提示し、実際に参加したスポーツボランティアの方々が「すごく楽しかった」と感じてくれて、そのほかのクラブ会員に語ってもらう。そういった活動が広がることで、積極的な楽しみの関わり方がデザインされていくのだと思います。スポーツを支える楽しみをどう立案するか、それが総合型クラブに求められる発想力です。スポーツボランティアは嫌々するものではなく、スポーツをするのと同じ爽快感を味わえるものなのだという前提に立って、クラブの皆さんに紹介していただきたいと思っています。



菊地 支えるスポーツの普及の重要性については、私も身近に関わりながら気づかなかったことですね。

二宮 支えるスポーツの普及は地域差がなく広くチャンスがあるものです。行政もそういう発想を持って総合型クラブを支援し、クラブ側も行政に対して関わり方の支援を要求する。総合型クラブには、スポーツをする場の提供だけでなく、その楽しみ方をさまざまなカタチで提示することも求められています。多様な可能性を探るための勉強会などはJ S V Nや地域のボランティア組織とも連携しながら行うべきだと思っています。

但野 ロンドンマラソンでは、地域のボランティア団体に優先出場枠があり、その出場枠をチャリティーとすること

でボランティア団体の活動資金となる仕組みを作り上げています。また、日常のボランティア活動の貢献度によって優先出場枠の数が変わるため、日々の活動や大会を盛り上げることが、団体の活動資金の確保にもつながるといいう仕組みです。

ボランティアがランナーを一生懸命に支えることで大会の雰囲気も良くなり、ランナーも楽しく参加できます。ボランティア・ランナー・主催者にとって好循環のイベントになります。

菊地 そのような仕組みは、日本でもぜひ実現したいですね。

但野 チャリティーイベントは、東京マラソンや大阪マラソンなどで行われています。私は、チャリティーを通じてスポーツの応援も支えるスポーツの一つだと思っています。

菊地 我々も横浜マラソンで経験するスポーツボランティアの楽しさは、今後、ぜひアピールしていきたいですね。

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ
テーマ 3

始めよう! スポーツボランティア!

—スポーツを“支える”文化をレガシーに—

**主役は選手だけではない
それがボランティアの魅力**

但野 これまで関心のなかった人たちが、20年東京オリンピック・パラリンピックを目指してスポーツボランティアを学び、大会に参加したいと考えてくれることは、とてもいいことだと思います。しかし、特に大きなイベントは一過性の要素も多く含んでいます。

20年の大会後もボランティア活動を続けていくため、大切なのは地域でのボランティア活動で楽しみを見出すことだと考えます。その重要な活動の場の一つが、総合型クラブなのだと思います。総合型クラブに関するボランティアの情報について、さらに探しやすいと思うので、ぜひ積極的に参加してほしいと思います。また、ボランティアの仕組みづくりを今から整えることが求められるのではないのでしょうか。

菊地 たしかに我々の関心は20年以降に、その意識をどう継続していくかという部分にあります。

二宮 その答えは一つで、常に活動の機会を提供するということです。オリンピック後に冷めてしまうのは、次の活動が決まっていなから。オリンピック以外にも、大きな大会はたくさんあります。継続することで仲間もできて、仲間との活動が新たな楽しみになる。そういう楽しみ方を、先に伝え

ることが重要なのです。

菊地 総合型クラブがすべきことは、活動の場を提供し続けることですね。

二宮 今すぐ全国ですべきなのだと思います。総合型クラブは、具体的な活動の場の提供やほかの大会との連携を図れる可能性を持つ組織です。20年は、その関係性を加速させる意味でも重要な大会になります。

菊地 オリンピック・パラリンピックに向けて、そして、終了後も含めて全国の総合型クラブにとって、この5年間は重要な期間です。明日からでも小さなイベントから盛り上げていく意識を持たないといけませんね。

二宮 教育との連携という意味で、今の道徳教育の副読本には視覚障がい



者の伴走をしている方が載っています。スポーツボランティアが紹介されているのです。スポーツボランティアの教育的なプログラムをクラブ会員だけでなく、地域の人たちに提供する講習会なども、総合型クラブが取り組むべき活動なのだと思います。実際に、多摩地域にあるスポーツクラブでは、伴走教室を開催したという事例があります。

菊地 SELFでも障がい者スポーツの場づくりを積極的に行っています。ダンスや卓球、カラオケなど週1回の活動を1年間続ける中で、参加した子どもたちがすぐ前向きになりました。地域のイベントにも参加するようになり、スタッフとしてお手伝いもしてくれています。その子たちにとって、今、パラリンピックではなく、オリンピックのボランティアをすることが大きな夢になっています。





会にいい交流の機会を与える装置になるかもしれません。スポーツを入り口に交流ができる場である総合型クラブは、そういった一番難しいことを担う重要なポジションなのです。

但野 スポーツボランティア活動は、年齢や性別、社会的立場や障がいのある・ないに関わらず、いろいろな人と交流できる場でもあります。そういう環境は少ないと思いますし、そういった意味でも有意義で魅力的な活動だと私は思います。

但野 20年は、障がい者スポーツへの理解を深める機会であり、海外から訪れる多くの外国人の方との交流により異文化に触れる機会ともなるでしょう。たくさんの人を受け入れるためには、まず「知る」ことが重要だと思っています。今後J SVNでは、障がい者スポーツにおけるスポーツボランティア活動や異文化を学ぶカリキュラムを実施する予定です。実は、最近ボランティアの方から要望が多い内容なのです。

菊地 そのような受け入れ体制の作り方などは、64年の大会とは全く違ったものになりますね。

二宮 64年が『競争』だったとするなら、20年は『共生』でしょうね。競技場や選手村などのインフラ整備は、労働力として国際的な支援が必要です。総合型クラブは、その人たちと地域社

菊地 ボランティアはすればするほど、自分の経験や感動になるのは確実に言えることです。それは、総合型クラブのメンバーも実感していますし、参加者も世代を越えた交流に関しては、文句なしに満足してくれているところだと思います。こういったことを、もっと対外的に発信していきたいですね。

総合型クラブは知名度や運営側と会員の意識の違いなど、まだまだ問題を抱えています。会員の皆さんにもクラブを作るという意識を持っていただくことが、100年続くための必須条件ではないかと思えます。そのため準備をしながら2020年を迎えて、さらにその後にも生かしていきたいと思えます。

但野 今、スポーツボランティア活動に参加したい人からの問い合わせがとても増えています。しかし、その方々の活動の受け皿になる組織が不足しているというのが現状です。スポーツボランティアとして受け入れてくれる団体とのつながりを築くことがJ SVN

の目的です。まだまだ微力ですが、スポーツボランティアをしたい人と、その活動を必要とする場をつなぐネットワークとして、日本のスポーツボランティア活動を推進していきたいとJ SVNは考えています。

